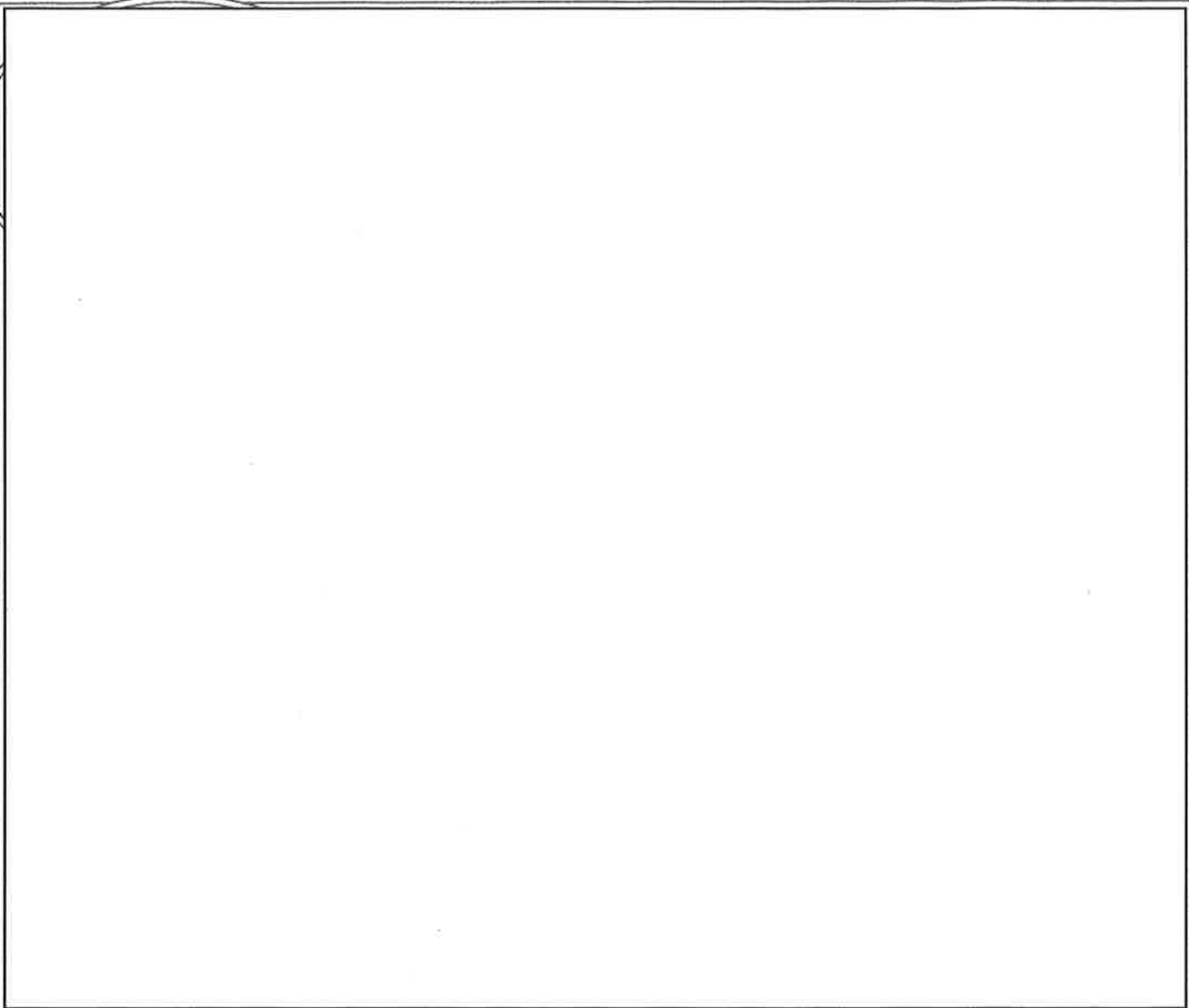




2012年9月15日 発行
 2012年 夏号
 <第19号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/下野英世 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 works-union@y3.dion.ne.jp http://www.v-aid.org/union/



「ぼくの、おもいで」

子どものころのおもいでには、たごあげ、べったん、こままわしです。ちんどんやもぎました。たのしかったです。いえのなかより、そとであそんでいました。

おとうさんは、せんちょうでした。おこづかいをくれました。いっしょにつりをしたり、パチンコをおしえてもらいました。おかあさんはやさしかったです。おこられたことはありません。

こうこうのねんまで、りょうにはいっていました。おんなのこと、フォークダンスをおどりました。やさしくて、けがながいおんなのひとつ、けつこんしたいです。いま、ぼしゅうちゅうです。けつこんしたら、とうきょうにすみたいです。

しゅうしよくをしました。しんどかったです。いまのほうがいいです。いまは、たくみで、おどつたりしています。またボルトのしごとがしたいです。

あとは、あたみにりょうがしたいです。むかしみたいに、またつりもしたいです。

浦島 富雄

集 —日々を寄り添いながら—

ワークス集は、平成十年四月一日にワークス清川として開所し、現在は大正区の鉄工所を改装した場所で仕事をこなしています。利用者は、男性12名、女性9名の計21名です。仕事に気持ちが向いている利用者が多いので、レクリエーション的なことより作業を中心にばりばりとがんばっています。最近では、仕事と休憩時間の気持ちを切り替えられるように、4階を「くつろぎの場」として、ソファ、本棚、花壇などを置いています。

三軒家東四丁目の通りを、はすかいに入ると今日も「カチツカチツ」とポルトを叩く音が聞こえてきます。

集では、これまでに仕事以外での様々な支援に取り組んできました。あくまで仕事をしっかりとするために取り組んでいることです。

Aさんは職員の付き添いでのパッケージセンターやお風呂へと行くようになりました。もともと色んな世界を見て知ってほしいと思いはじめた活動です。私は当初Aさんの普段の行動をみて、一見何処でも一人で行動する人と勘違いしていました。実際は行っている様で、私達が思っている以上に狭いのです。近所にある

ごく普通の店でも、一度も入ったことのない所はどういう場所なのかどんな人がいるのか想像する事が難しく、行きにくく怖い所であつてきつかけがないとなかなか踏み込むことができないのです。そこで職員が一緒にお店に入ったりして彼にとつてのちよつとしたきつかけを作り、世界が広がる喜びを経験するための支援を続けています。

また、仕事のこと以外は自分から会話をしようとならないBさんがいます。神経質なところがあり仕事に厳しい人なので、口を開けば仕事に対する不満が目立つてしまいます。そのことは周囲の利用者には楽しくないため、人間関係を形成す

るのが難しくなっていました。心配性で、仕事に困っている人がいると真つ先に手伝いに向かうやさしいところもあるのです。そのやさしさをもちと生かし、表にだすことができようになり気持ちに余裕をもってほしいというのが職員の思ひでした。そこで思いついたのがお風呂です。作業場と違いお風呂は裸のつきあいということもあり普段話さないうことを話せたりする場です。本人もリラクセスしているのでも色んな悩みや思いを話してくれることがあります。職員もその辺を

考えて動いています。他には中々進める事が出来なかつた歯科通院。以前より職員は利用者の虫歯が

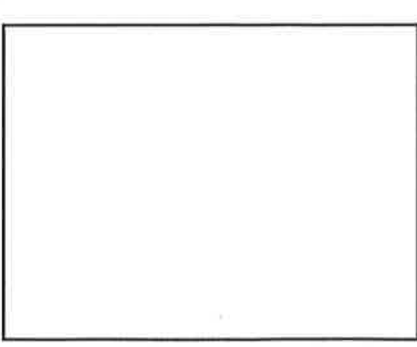
気になり何度も声掛けをしてきてました。しかし歯科通院は痛いイメージが色濃くついており、良い返事が貰えることがありませんでした。ある時、Cさんが歯が痛いので通院したいと言われました。Cさんは痛いと言われた時は行きませんが、継続して通院することが中々難しいのです。どうすれば長く通えるかと考え、職員が何件かの評判の良い歯医者を探してCさんに選んでもらいました。その歯科医院は治療室にも付き添いで入ることが可能で、Cさんも横に居てくれてると「安心するわ。心強い」とも話していました。

このような支援を続けたことが功を奏したのか、今まで歯科通院に行けてなかった利用者にも感化し現在では、昔の集では考えられない人数の5人ほどが通院をしています。それも短期間ではなくもう半年以上続けることができている。これには職員も本当に驚いています。きつかけを作つたのは職員や保護者だとし

ても、この継続は彼らが普段の作業や生活で培つてきた力なのだと思います。暑い日も寒い日もワークス集で作業をしてきたことが、自信や忍耐力に繋がりが、苦手なことでも継続できる基礎になったのではないのでしょうか。牛の歩も千里といいますが、まさにこのことだと思います。

これからもきつかけを作れるように、後ろより支える支援をしていきたいと思つています。

(黒川 島村)



翔 —働くとどうなるか—

「翔」は、清掃のプロ集団を指し、職員・利用者共にきびしい清掃の訓練を受け、ほうき・モップの使い方・トイレ清掃の手順など・清掃の基本的なノウハウを身につけ、仕事を行っています。そんな彼らの卒業生の中には、企業の清掃のプロとして活躍している人もいます。

「翔」の清掃場所は、当初は午前中にスポーツセンターと3カ所のマンションの清掃を行い（曜日別）、午後からは企業内の清掃を行っていました。しかし現在、午前中に清掃していたスポーツセンターの清掃はなくなってしまう、今は、大正・弁天町近辺のマンション清掃、午後からは企業内の清掃に代わっています。

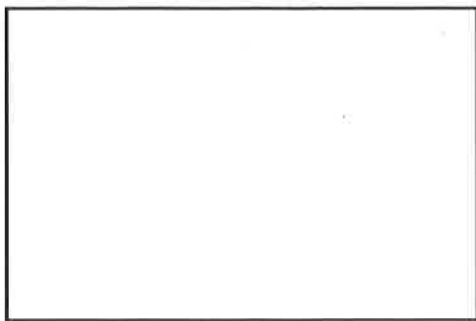
「翔」の午前中の仕事は、とにかく夏は暑くて、冬は寒い。そんな中、彼らはなぜ「翔」で働いているのでしょうか。

「翔」の清掃は、挨拶と清掃場所の確認から始まります。「おはようございます」「今日の階段担当は〇〇さんです。」各清掃員は、担当場所を確認し、責任を持って清掃します。

午前中の、マンション清掃では、各階に別れて担当場所を掃除します。ほうき・モップ・ぞうきを順に行ないます。担当場所が終わると、キレイに出来ているか職員と一緒に確認し

ます。そんな彼らも、時に、こんな失敗をすることもあります。仲間の利用者と大きな声で話していると、マンションの住人から「声がうるさくて寝られない。」という苦情がきたり、キレイに清掃しようと思うばかりに、何度も何度も玄関ドアをふいていると、「玄関から誰かが覗いている」などの苦情もありました。

そんな時は、すぐにみんな、今日あった苦情について、話し合います。なぜ苦情が起きたのか、仕事のおしやべりについてはどうなのか、どんな事をした

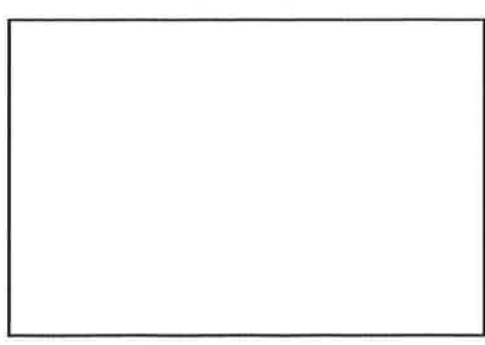


ら迷惑になるのか。一つ一つみんな解決の糸口を探していきます。そして、次に繋げられるように改善していきます。

迷惑になるのか。一つ一つみんな解決の糸口を探していきます。そして、次に繋げられるように改善していきます。

こんな失敗もある彼らですが、普段の彼らの清掃ぶりを見てくれている人は

たくさんいます。清掃をしていると「いつもありがとうね」「きれいになったね」など声をかけてくれる人達も多く、そんな時は、みんなも強い力をもらって仕事にも1段と磨きがかかります。人に会ったら挨拶をする。住人さんに迷惑にならないように清掃をする。そんな当たり前のことを当たり前に出来る様に心がけ、日々仕事に取り組んでいます。



企業内清掃では、まさに企業の人達が仕事している中での清掃になります。彼らは、緊張しながらも担当の仕事をごなしていきます。仕事内容は、ロッカー・会議室・休憩室・喫煙室の拭き掃除、床面コロコロ、染抜き、ごみの回収・分別などをを行っています。

ある利用者は、ごみの分別・古紙回収に力を入れていきます。誰に言われることなく、各回収場所から古紙を持ってきて集めます。ごみの分別も普通ごみにペ

ットボトルが入っていないか確認し、ごみを分けていきます。そんな彼らを見て企業の社員さんも言葉をかけてくれます。

清掃という仕事は、ダイレクトに彼らに帰ってきてきます。いい時も、悪いときも。彼らは、その生の声を感じ受け止め日々の仕事に向かっているのです。彼らが「翔」でありたいのは、企業で働いている。地域で働いている。そしてみんなに認められている、自分たちがあるからではないかなと思います。そんな彼らと一緒にこれからも働いていきたいと思えます。(松川)

窓際おじさんの ひとりごと

七月より事務体制を整えるため事務所の配置換えをし、南向きの窓辺に私の机を移動させた。

職員たちは、暑くないかと心配してくれるが、人一倍寒がりの私には、ちょうど快適である。

振り返ってみれば私も既に五十六歳。

一昔前なら第一線を退いていてもおかしくない年齢。ついに「窓際族」と言われる年齢を私も迎えたのかとの思いが強い。

そういえば、今年の「職員顔合わせ会」で、「少しずつフェードアウトの準備をしていこうと思う。」と職員に話したのを思い出したが、これを機に「決定権」も若い職員にどんどん譲って行こうと考えている。

今まで、仕事中心の生活で、趣味も娯楽も持ち合わせていない私なので、現役

を終了すると、暇をもてあましてしまうのだろう。

ぼちぼち、老後の楽しみとなるものを探して行きたい。

ワークスユニオンの今年の課題は、高齢期を迎えた人の安心で充実した暮らしの創造。

「日中支援」、「生活支援」の両面での環境づくりを行うこと。

七月に日中支援の場としての生活介護事業所「匠」を開所し、生活面でも、徘徊などの状況が出て、支援者のサポートを受けながらゆったりと暮らせる部屋をケアホーム内に設けた。

ハードを整えただけでなく、まだまだ、ゆったりと充実した暮らしのあり方までは煮詰めきれないが、一人ひとりの利用者のオーダーメイドの老後の暮らしを創っていききたい。

(南石)

職員紹介

南石 勲 (むい) 所長

世の中のありえないものなんて全く興味を示さず、現実世界をただひたすらに開拓する男。

お世辞やごますりには彼の中には、ありません。

現実に起こったことに、ただ真っ直ぐに向き合います。趣味は、たばこにお酒。

その所長の姿は、まるで巨人の星にでてくる「二徹」親父のようです。

そんな所長は、一見とっかかりに悔い存在と思われがちですが、嘘のない、ありえないくらい、信頼出来る男です。

また、家に帰れば、愛犬と奥さんにでれでれしているとかいいたいか。

(松川)

助野 祐子 (すけ) 事務

岩本さんの退職後の七月より、総務全般を統括してくれているしつかり者で

ときばきと事務処理をこなす助野さん。

事業所には行かないので利用者との面識はほとんどないが、毎度毎度の電話魔(?)の利用者コールにとっても楽しそうに対応している。

そんな彼女の苦手は、お酒と健康診断で飲まされるパリエウム。検診後の午後には、必ず有給休暇。

天敵は、机の上が片付けられず、チェックの甘い松川主任と、食いしん坊のお嬢さん。

家でも職場でも、バトルは、絶えない。

(南石)

編集後記

▼毎度のことですが、新年度になると、新しい事業の準備でバタバタしたり、職員体制が替わったりで、つい機関紙発行が滞ってしまいます。しかし、滞ってしまう原因は日頃の業務の忙しさだけなのか?そもそも機関紙は何のために作っているのか?編集会議で、機関紙について改めて考えました。▼話し合いでは、あわや廃刊の方向にも大きく傾きましたが、最終的に編集委員が導き出した答えは「機関紙は使命だ」ということ。▼この仕事に携わる限り、自分の思いを第三者に伝えていかなければならない。担当者がこれまで現場報告を重視していたなら、もつと思いを伝えるものにしよう。そう再確認しました。▼そうして漕ぎつけた今号。思いを上手く伝えられてはいるかはわかりませんが、今後共どうぞよろしくお願い致します。(S)